紹介

角谷英則著『ヴァイキング時代（シリーズ：諸文明の起源9）』

「ヴァイキング」という言葉には、さまざまな語弊がある。歴史上は、八世紀末から一一世紀半ば頃のヨーロッパ各地に集団で現れたスカンディナヴィア人のことを指すが、日本人の一般常識に照らしてまず連想されるのは、バイキング料理、もしくは「海賊」であろう。本書はそのように「ヴァイキング」のイメージへの言及から始まり、一般読者向けに「ヴァイキング時代」の特質を紹介するとともに、考古学・歴史学界における最新の研究成果をもとに「いかなる過程をへてスカンディナヴィアはヨーロッパ、すなわち文明の一部となったのか」（一八頁）という問題を考察する。

本文は全五章で構成され、まず第一章「ヴァイキング時代」を考えるために」においては、議論の前提となる研究状況と問題点が提示される。その際、著者はとりわけ一九世紀以降のスカンディナヴィア・ナショナリズムとヴァイキング史研究との錯綜した関係を詳察し、ヴァイキング史の叙述に今なお残る「暗示的なナショナリズム」（一七頁）に注意を喚起する。

第二章「移動の時代――銀がたどった道」では、ヴァイキングの対外膨張の一例として、東方・スラヴ人地域における活動が描写される。ロシアの国家形成にスカンディナヴィア人が果たした役割をめぐる「ルーシ問題」とも絡む本章には、最も紙幅が割かれており、豊富な考古資料、ルーン碑文、数少ない叙述史料が駆使され、ヴァイキングの残したまさに「足跡」が、丁寧に追跡されている。

「外」へ向かう活動から転じて「内」における生活に目を向けるのが、第三章「ヴァイキングを生んだスカンディナヴィア」である。ここでは、主にスウェーデン中部の都市的集落ビルカの検証を中心に、H・ピレンヌ以来の国際商業論の展開を通し、ヴァイキングの「都市」がスカンディナヴィア、ヨーロッパ、さらには世界史の中で持った意味を検討する。

第四章「ヴァイキング時代の社会」は第三章を受け、ヴァイキング時代における「商業」とは何かを追求する。焦点となるのは「贈与」から「市場的交換」へ、この時代にゆるやかに進行した経済観念と行動の変化である。

最後に第五章「ヴァイキング時代の王権と都市」においては、前述ビルカのような都市的集落建設の立役者、「王」という存在について論じられる。ヴァイキング時代は、支配下の人々の合意に立脚していた王が、改宗を通し、ローマ＝カトリック教会のイデオロギーに正統性の根拠を求める存在へと変わりゆく過程にあった。そして著者は、そのような変化も「ヴァイキング時代にその端緒がひらかれた社会変動」（二六二頁）の一要素であるとし、スカンディナヴィアの文明＝ヨーロッパ化を示す多重的な社会変動とその要因について、さらなる検討を促し、本書を結んでいる。

長年支配的であったヴァイキング＝「海賊」というレッテルに対し、ヴァイキング＝「商人」をはじめとする多彩な性格が主張されるようになり、既に久しい。本書の考察対象は確かに、「諸文明の起源」とい

うシリーズの「ヴァイキング時代」と銘打つには、著者も自覚するように（一八頁）限られた部分に過ぎず、例えばヴァイキング＝「農民」という側面等は殆ど検討されない。しかしそれでも本書は、ヴァイキング研究における近年の問題意識を如実に反映し、ナショナリズム、ヴァイキングの「商業」といった未だ誤解を生じやすいテーマを積極的に議論の俎上に載せた、意欲的なヴァイキング史入門書である。初期中世ヨーロッパにおいて、信仰をはじめ様々な面で異彩を放つ「ヴァイキング」という存在に少しでも興味を持たれた方には、一読をお薦めする。

（四六判　二八七頁　二〇〇六年三月　京都大学学術出版会　税別一八〇〇円）

（松本　涼）

マリア・ロサ・メノカル著（足立孝訳）『寛容の文化』

近年の中世スペイン史研究上のキータームであり、また今日の宗教間の対立を考える際に寄与するところの大きい宗教的寛容を軸に、アル・アンダルスにおけるイスラム教徒・ユダヤ教徒・キリスト教徒の文化混淆を概説したのが、本書マリア・ロサ・メノカル著（足立孝訳）『寛容の文化――ムスリム、ユダヤ人、キリスト教徒の中世スペイン――』名古屋大学出版会、二〇〇五年（原著：María Rosa Menocal, *The Ornament of the World: How Muslims, Jews and Christians Created a Culture of Tolerance in Medieval Spain*, New York, 2002）である。

本書の構成は左の通り。

一．序論（一―一一頁）

二．第一級の土地の簡潔な歴史（一三―四七頁）

三．記憶の宮殿（四九―二九七頁）

序論では、アブド・アッラフマーンのアンダルス亡命からムスリムの半島への侵入の経緯が前史として述べられ、次いで三宗教によって育まれた寛容の文化を、ヨーロッパの歴史と文明に多大な影響を与えたものと意義付けることで、本書の執筆意図を明らかにしている。続く第二部「第一級の土地の簡潔な歴史」では、第三部で述べられる諸々のエピソードを経由しつつ、概説的にアンダルス史が論じられる。そして本書の中心である第三部では、その舞台に登場する様々な史実を背景にしながら、叙情豊かに寛容の文化に関する種々のエピソードが描かれている。

著者マリア・ロサ・メノカルは中世スペイン文学を専門としていることもあり、本書で引かれている文化混淆の事例には、やはり文学に関するものが圧倒的に多い。以下、紹介者にとって興味深いと感じられた事例を二点紹介していこう。

一つ目はその文学に関するものから。「愛と愛の歌」（一一四―一三三頁）では、詩と詩形式の文化混淆の様子が語られる。具体的には、一一世紀半ばごろの俗語による恋愛詩集の成立にはじまり、ムスリムの詩歌がノルマン人を介してキリスト教国へ伝播したこと。そして俗語の詩作活動の結果生じた、アンダルスにおける民衆文化と宮廷文化の「結婚」がその例として取り上げられる。ロマンセ（スペイン独特の詩形式）におけるムスリムの文化的影響は、一九世紀のロマン主義の時代（例えばリーバス公爵 Duque de Rivas など）にすでに指摘されているが、それが一〇六四年のノル